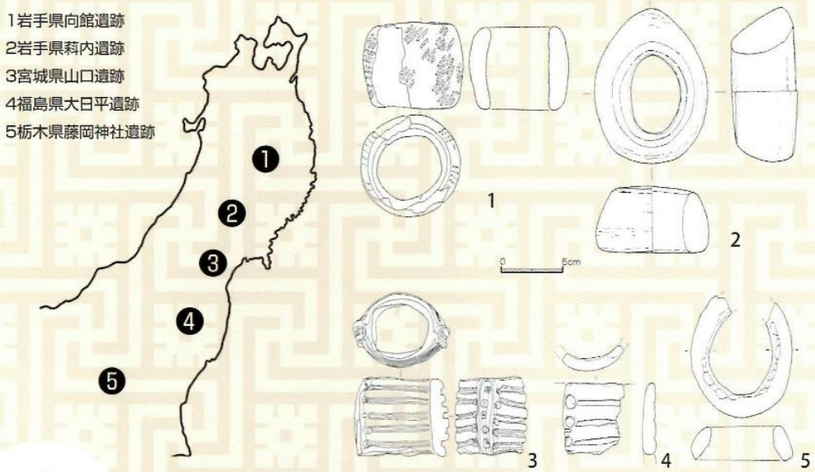
3. 市内から出土した縄文時代の腕輪

写真は市内から出土した「土製腕輪」です。類似する資料が東日本の内陸部から出土し、寸法と形状から腕輪とみられていますが、注目すべきは表面に施された模様です。円形の刺突と数条の沈線は貝輪の連なりを表現すると考えられています。これまでに、郡山での貝輪の出土例はありませんが、「土製腕輪」は人々の貝輪に対する思いを示す貴重な資料と言えるでしょう。



今回の企画展では、縄文時代から古墳時代の前期までの腕輪をご覧いただきましたが、市内でのその後の事例は、麦塚古墳から出土した人物埴輪の手首に腕輪が表現される程度となります。他方、改めて大安場古墳出土の腕輪形石製品をみますと、分布の北東端を示す資料として非常に貴重な価値があり、私たちは後世に守り伝えていく必要があるといえるでしょう。

土製腕輪の類例
(吉田泰幸 2007を基に加工)

引用参考文献

北條　芳隆　1990『待兼山論叢. 史学篇』「腕輪形石製品の成立」
佐田　　茂　1991『考古学ライブラリー63　沖ノ島祭祀遺跡」ニューサイエンス社
米川　仁一　2006『大和の考古学 第3巻』「6腕輪形石製品」奈良県立橿原考古学研究所監修
近畿日本鉄道株式会社
橋本　達也　2006『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』
「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」
沖縄県立埋蔵文化財センター
2008『平成20 年度企画展』「原始人の知恵と工夫」－ 天然素材(貝殻・骨・角・牙)の活用
蒲原　宏行　2010『古代学研究187』「腕輪形石製品研究の歩みと課題」古代学研究会
伊藤　雅文　2010『古代学研究187』「腕輪形石製品生産モデルの素描」古代学研究会
北山　峰夫　2010『古代学研究187』「古墳時代前期における石製品の生産動向」古代学研究会
三浦　俊明　2012『石川県立歴史博物館紀要24』「古墳時代前期における石製品の流通」
忍澤　成視　2012市原市教育委員会『体験☆理文講座No.1』「貝アクセサリーづくり教室」
川口　陽子　2013『ナガラ原東貝塚の研究』ナガラ原東貝塚出土ゴホウラ製腹面貝輪片について
北條　芳隆　2013『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』「2②腕輪形石製品」
中村　友昭　2014『古墳時代の地域間交流2』「琉球列島産貝製品からみた地域間交流」
九州前方後円墳研究会
渕ノ上隆介　2014『古墳時代の地域間交流2』「腕輪形石製品」九州前方後円墳研究会
柳沼賢治ほか　1996『大安場古墳群測量調査報告書-』福島県郡山市教育委員会
柳沼賢治ほか　1997『大安場古墳群-第一次発掘調査報告-』福島県郡山市教育委員会
柳沼賢治ほか　1998『大安場古墳群-第二次発掘調査報告-』福島県郡山市教育委員会
柳沼賢治ほか　1999『大安場古墳群-第三次発掘調査報告-』福島県郡山市教育委員会
柳沼賢治ほか　2003『大安場古墳群-第四次発掘調査報告-』福島県郡山市教育委員会
柳沼賢治ほか　2004『大安場古墳群-第五次発掘調査報告-』福島県郡山市教育委員会
柳沼賢治ほか　2005『大安場古墳群-第六次発掘調査報告-』福島県郡山市教育委員会
小田富士雄ほか　2011『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告I
宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議(福岡県・宗像市・福津市)
福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室
小田富士雄ほか　2012『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告II-1
宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議(福岡県・宗像市・福津市)
福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室
小田富士雄ほか　2012『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告II-2
宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議(福岡県・宗像市・福津市)
福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室
小田富士雄ほか　2013『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告III
宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議(福岡県・宗像市・福津市)
福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室
佐藤　　洋　1981『山口遺跡発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書33』
工藤　利幸 1982『萪内遺跡　岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書32』
笹平　克子 1994『向館遺跡発掘調査報告書　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書206』
手塚　達弥 1999『藤岡神社遺跡(遺物編)　栃木県埋蔵文化財調査報告197』
吉田　泰幸 2007『名古屋大学博物館報告No23』「福島県大日平遺跡出土の縄文土器と土製腕輪」

大安場史跡公園 平成29年度 第1回企画展「腕輪の考古学」

会　期：平成29年7月8日(土)▶8月27日(日)　　会　場：大安場史跡公園ガイダンス施設
主　催：郡山市／郡山市教育委員会／大安場史跡公園(公益財団法人郡山市文化・学び振興公社)
協　力：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 / 宗像大社 (順不同・敬称略)

大安場史跡公園管理センター(公益財団法人郡山市文化・学び振興公社)

〒963-1161 福島県郡山市田村町大善寺字大安場160番地　TEL.024(965)1088 FAX.024(965)1090
E-Mail oyasuba@bunka-manabi.or.jp　Web http://www.bunka-manabi.or.jp/oyasuba

VEGETABLE OIL INK
紙へリサイクル可
ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C020493
この紙はFSC認証紙です。

大安場史跡公園 平成29年度 第1回企画展

腕輪の考古学

腕輪はその名の示すように、
ヒトの腕に着ける輪状の造形物です。
日本では主に、縄文時代から古墳時代の遺跡から出土します。
大安場古墳群では1号墳から腕輪形石製品が出土し、
古墳出土資料としては東北地方で唯一の資料であるため、
他の出土資料と合わせて福島県指定重要文化財に指定されています。

大安場史跡公園
公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

1. 腕輪概説
― 腕輪の歴史 ―

縄文時代の腕輪

縄文時代の腕輪は粘土を焼いた土器質や植物の繊維などがありますが、最も多い資料は貝殻製の貝輪（貝釧）です。縄文時代の早い時期（約7,000年前）に二枚貝に穴を開けた貝輪が現れ、材料となる貝の種類を変えながら、西日本や房総半島・本州北部などの各地で貝輪が作られました。

後期（約4,000年前）になると貝輪の量は急激に増え、千葉県の銚子市には2000点におよぶ作りかけの貝輪が出土した遺跡があります。この時期の東日本ではベンケイガイが多くを占める一方で、伊豆諸島など南方海域を原産地とするオオツタノハを利用した貝輪も愛知県から北海道にかけて出土しています。縄文時代を通じて約200点とわずかながら、出土地点は約70箇所にも及んでいます。オオツタノハは各地で貴重品として認識されたのでしょう。

縄文時代の貝輪は一緒に出土する人骨の分析結果から、主に女性が用いていたとみられます。また、一緒に出土する資料に耳飾や垂飾があることから、装身具としての用途が考えられます。

弥生時代の腕輪

縄文時代を通して腕輪の大半を占めた貝輪は、弥生時代にも作られます。主な材料としては、南海産のゴホウラやイモガイ、オオツタノハなどが使用されました。このうちゴホウラ貝輪は、中期後半頃に形状に変化が現れ、ほぼ同時期にモデルを同じくする金銅製の銅釧が北部九州で作られました。また、イモガイに似た銅釧も作られており、入手できる貝の数量が需要を満たせなくなったことが、銅釧製作の理由と考えられています。

この時代の腕輪は、特に九州地方では複数の銅鏡を伴うこともあることから、権威を示す物であったと考えられます。また、男性の人骨とも一緒に出土することや、何枚もの貝輪が腕に着けられている様子は、縄文時代とはちがった意味を持つ可能性があります。

鹿児島県南種子町
広田遺跡出土資料
（弥生時代）
下層にオオツタノハ、上層にゴホウラ製の貝輪が多い出土傾向があり、貝種の変化が分かっている。
国立歴史民俗博物館所蔵

古墳時代の腕輪

この時代の代表的な腕輪は、古墳から出土した腕輪形石製品です。腕輪形石製品は、鍬形石・車輪石・石釧の3種に大別され、それぞれが弥生時代のゴホウラ・オオツタノハ・イモガイなどの貝輪をモデルとするとみられています。これまでの出土数は、鍬形石188点・車輪石521点・石釧912点（三浦2012による）を数え、畿内（現在の奈良県・大阪府・京都府と兵庫県の一部）とその近接地域を中心にした前期古墳から出土しています。

腕輪形石製品研究の現在

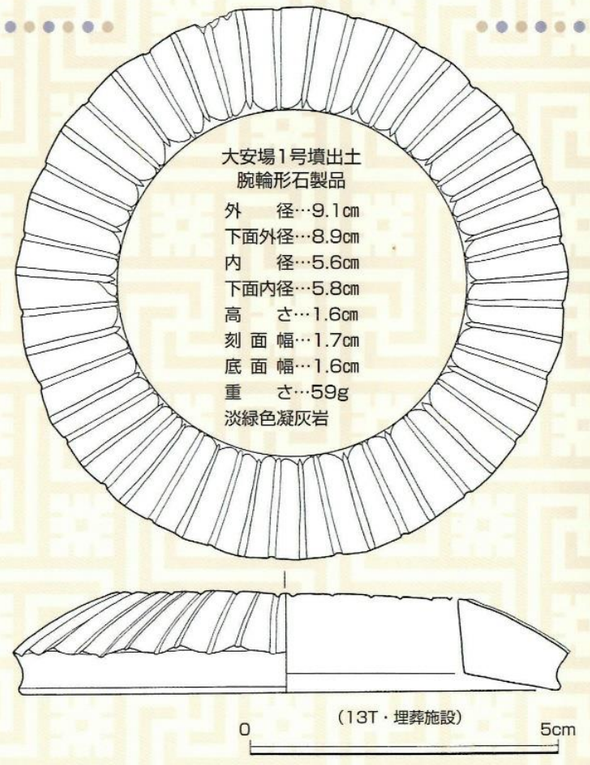
腕輪形石製品の多くは畿内地域の前方後円墳に副葬される遺物です。これらは、鍬形石と車輪石が前方後円墳に優先して副葬される傾向にあり、石釧のみは墳形に関わらず広く副葬されることが分かっています。副葬される古墳の規模については、規模の大きな古墳ほど3種類を揃える割合が高く、以下鍬形石・車輪石、鍬形石・石釧、車輪石・石釧の各組合わせ順に古墳の規模は小さくなるようです。このため、厳密ではないものの、鍬形石を上位として次が車輪石、その次が石釧という順位が考えられています。

腕輪形石製品の材質は、古い年代の資料には、濃・淡緑色の碧玉と緑色凝灰岩があり、時期が下ると緑色凝灰岩が多く使われます。また形状に関して、鍬形石のモデルは畿内の古墳から出土した文様が彫られた貝輪が有力視されており、車輪石と石釧のモデルは畿内にもたらされた多様な腕輪（貝輪や銅釧）とみられています。

2. 大安場1号墳の腕輪形石製品

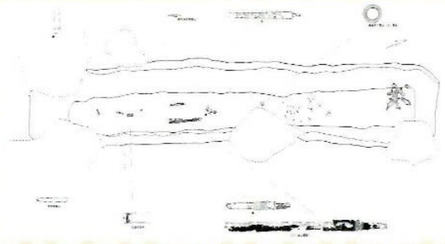
大安場1号墳（以下、大安場古墳）は平成3[1991]年に発見された前方後方墳です。郡山市教育委員会が、平成8～16年度に発掘調査を実施し、古墳の概要が判明しました。平成12[2000]年に国史跡に指定された際に腕輪形石製品（以下腕輪）は「宝器」と表現されており、17年が経過した現在でも、その評価は変わりません。むしろ、現時点では東北地方唯一の古墳出土資料として、その希少価値は一層高くなっています。

大安場古墳の腕輪は、3種類の腕輪形石製品の中では、その刻み模様が石釧に似ていますが、リングの幅が高さより大きい点で車輪石とも呼ぶこともでき、中間的な形状と言えるでしょう。



腕輪形石製品出土状況
粘土床上から出土した腕輪。床との間の土がわずかに朱色を呈していた。

腕輪は後方部上で検出した粘土床のほぼ中央から刻線面を下にして出土しました。この粘土床は、短軸方向の断面がU字形を呈しており、木をくり抜いて作った木棺を安置したと想定できる遺構です。大刀や剣など鉄製品もこの範囲で出土しているので、大安場の副葬品は棺内に納められていたことが分かります。また、粘土床の中央から北側にかけて検出された朱は、出土状況から「朱散布→腕輪配置→朱散布」という儀礼の流れが推測されます。



腕輪の位置は、左側に遺体がある場合はその頭部に、右側の場合は手首付近にあることが分かります。　… 粘土の範囲

大安場古墳の副葬品は、畿内の古墳とは配列状況が異なることが判明しています。このことは、地方への腕輪形石製品の波及が、畿内との個別な事情によるものと考えられています。その一方で、腕輪形石製品が副葬された意味は、畿内との祭祀秩序の共有を示すとみられています。